

安政4年(1857)6月、岩手県水沢に生まれる。おそらくこの人物ほど、広い意味での“国づくり”にその縦横の手腕を発揮したものはないであろう。専門といえば“医者”である。それが役人によって一般的の行政に携るが、その業績は、日本が“日清戦争”によって“領土”とした台湾の行政長官として、“日露戦争”によって、敷設の権利を獲った当時の“南滿州鉄道”的総裁として、いわゆる“植民地的行政”を総括した。それが国政の行政施策に当っても現われ、巷間では“後藤の大風呂敷”とか“この際主義”などという評価も受けたのである。しかし他の一面では「少年団組織」の総裁となり、團服に身をかため、少年達と行進する。そのままの姿で役所に出勤するという行動さえあえていたのである。

大正9年12月、選ばれて東京市長となる。当時の市長は“市会による選挙”地元の利益にこだわる傾向のある議員達とはソリが合わない。11年3月に、当時の安田財閥から市の公会堂を作る経費の寄付を受けた。それで建築されたのが現在の“日比谷公会堂”。但しそれには



“市政会館”が付属し、「東京市政調査会」という財团法人に所属している。後藤はそれを個人との寄付と理解したが、議会は“東京市政”と主張し、最後は公会堂は市に帰属することで決着をついている。しかし都市問題等の調査が社会の干渉なく実施すべきという後藤の見識は、十分に評価される。ビアード博士などを呼んで、我國の知識を都市の研究に取り入れた如きはその一面である。しかし在任2年余、大正12年4月に市長をやめ、その後に東京は大震災に遭う、市長在任中に“8億円構想”を公にしたこともあり震災直後は、内務大臣として災害復旧に關係する。「帝都復興4ヶ条」を公にし、その基本として焼土となった当時の東京市の土地を“30億円”で買収し、理想的な“まちづくり”を提倡したことによく識られている。しかし当時の臨時帝国議会は地方を犠牲になると反対し、内務大臣を辞職する。その後は、自らつくった東京市政調査会を主宰する傍ら、当時のソ連等外国との友交を維持することに貢献した。しかし当時の政府とは必ずしも円滑な関係はなく、しばしば総理大臣の指命候補にあがりながら、結局は“在野の聖人”として生涯を終える。昭和4年(1929)4月13日逝去。